

ARCLE REVIEW はこの度、第3号を迎える。本号では、いよいよ始まる小学校英語の在り方と中学・高校の英語教育への影響について様々な観点から検討する。

小学校への英語導入が正式に決まり、『英語ノート』が作られ、国や各自治体における小学校教員の英語活動指導者としての研修が始まった。今まで英語活動を行ってこなかった学校や教育委員会でも、ようやく重い腰を上げ始めている。しかし、小学校では、「英語そのものを教える」のではなく、英語を使ってコミュニケーション活動を行うことが目的となっている。このことを、学習指導要領では、英語によるコミュニケーションの「素地」と呼んでいるが、これが実際に何を意味するのかについては、明確な定義はない。そのため、現段階では、学校毎に様々な方法で英語活動のやりかたが試されている、というのが本当のところだろう。

しかし、今後の大きな問題は、小学校の英語活動が中学・高校の英語教育とどのようにつながっていくか、ということである。小学校での英語活動が何を目的とし、英語によるコミュニケーションというものが、英語のどのような知識、あるいは、技能を必要とするのか、という問題に何らかの回答(方向性)が示されない限り、小学校英語がそれ以降の中学・高校の英語教育にいかに関与するかはなかなか見えてこない。そして、それが見えない限り、せっかく小学校で英語が導入されても、中学・高校における英語教育の在り方について議論することは難しい。

このような点を踏まえて、本号では小学校英語の現状分析から、「素地」が意味するもの、小学校におけるコミュニケーション活動の在り方と、それを通して小学生に身につけて欲しい英語をどのように捉えているのか、そして、小学校英語活動と英語そのものの知識やリタラシー育成の問題などについて論じる。それらの議論を通して中学・高校の英語教育を見据えた上で、小学校英語活動が目指すべきもの、その中における「英語」という言語の位置づけについて考える。

小学校英語以外のテーマとしては、文法の知識をコミュニケーション活動の一環としてどのように融合させていくかについて、また、リーディングの指導を従来の「意味」中心のものから「共感的読み」を目指したものにするためにどのようなことを考えなければならないかについてを、ECFの理論的枠組みの中で論じている。さらに実証的研究として、CEFRの基準を用いたリスニング・テストの問題点、そしてテストの課題としてのライティングを、受験者がどのように捉えているかについて考える。また、英語能力の異なる学習者に見られる、ライティング課題でのGlobal Errorの違いについても検証している。

以上、本号においては、小学校英語導入の意味と、中学・高校での英語教育やテストの将来展望について幅広く論じている。

今後もARCLEは、教育現場で実際に起きていることから具体的な課題を見つけ、それを解決していくためのアクション・リサーチを推進し、日本の英語教育の改善のために研究を進めていく所存である。

上智大学外国語学部長・教授 / ARCLE代表

吉田研作